茶の間でくらす

－八女茶業における地域個性の継承とコミュニティの再構築－

Keywords
茶　農業　地域コミュニティ
フードスケープ　スローフード　個性

DZ21164　細川　すず

1. はじめに

上京して一番最初に感じたのは地元とのギャップである。住民同士の会話はなく、特定の目的がない限り、人が集まることのない都心部での暮らしに違和感を覚えた。都心部では高密度な人口と発達した物流インフラを活用したデリバリーサービスが普及しており、コミュニケーションの効率化が顕著に見受けられる。人々がある程度の距離を保ち、誰かに頼らなくても生きていける利便性を追求した都心部のコミュニティのあり方は現代の都心らしさともいえる。地方においても利便性の向上を目指す傾向がみられるが、交通インフラの未整備や高齢化、地域特性により上手く成立していない。不十分な利便性の追求は現在のコミュニティを希薄化させるだけでなく地域特有の文化や産業の衰退を促し、地域の個性をなくす要因になってしまうのではないかと考えこの研究に至った。

2. 研究背景

2.1問題提起

地域に合わせたコミュニティのあり方を確立しなければ独自の文化や産業が衰退し、地域の個性が曖昧なものとなり、土地が均一化していくと考える。現状として地方では特に少子高齢化と人口減少が進行し、地域内で独自の個性を保護し続けることは難しい。これらの問題から、その土地に住まう人に限らず日本全体で地域の個性を尊重することが重要であり、場合に応じて地域コミュニティの範囲を拡張する必要があるのではないだろうか。

2.2地域の個性

地域の個性とは地域独自の歴史や文化、自然環境など複数の要素から構築される。また、匂いや音など五感で受け取るものやその土地に住まう人々が時間をかけて築いた生活様式や結びつきも重要な要素である。これらの要素が交わり地域の個性として確立される。

2.3食という要素

食は個性を形成する要素の中でも最も重要な要素であると考える。地域特有の食材や料理はその土地の気候や土壌、伝統的な農法や歴史と深く結びついている。また、地域の食を支える生産の場や小売店なども地域の風景を構成する不可欠な要素である。季節によって変化する美しい風景は地域の個性として記憶に残る象徴的なものである。

これらの地域の食と食を取り巻く環境を守る行為そのものが地域内での生産者同士あるいは住民同士の結束を強め、コミュニティ形成の基盤となっている。しかし戦後の高度経済成長期以降、工場による大量生産と交通インフラの整備により分業が進み、食の生産と生活圏が分離した社会構造が形成された。これにより生産者と消費者のつながりが弱まり地域産業の弱体化を招いた。

そもそも食がなぜ重要な要素として地域及び人々と密接に関係しているのだろうか。私たちにとっての食とは生きる上で欠かせない行為であり、年齢、国籍問わず誰にとっても身近なもので生活と深く関係している。単に栄養を補給する行為ではなく人と人、人と場所を繋ぐ重要なツールだと考える。

4. 対象敷地

4.1敷地概要

対象敷地は福岡県八女市星野村の広内・上原地区の棚田の展望台とする。星野村は福岡県南部に位置する県内最大の森林のまちである。江戸時代から続く林業が盛んであり春から夏にかけて茶業、秋から冬にかけて林業の伐採搬出というように季節に合わせて仕事が行われてきた村である(図１)。

図１　星野村茶畑の様子(筆者撮影)

標高200～600メートルの山間部に位置し、温較差が大きい気候と排水良好な礫質の土壌が茶の生産に適しており、緑豊かな茶畑が至る所で見受けられる。

研究指導：山代　悟 教授　　Suzu Hosokawa

4.2 敷地分析

星野村では茶産業が発展しており、なかでも八女伝統本玉露と呼ばれる伝統製法を用いた茶業が特徴的である。茶業の営みがつくる生産の風景が星野村の個性を象徴するものである。八女伝統本玉露は厳しい生産条件のもとブランドの質を保っている。しかし、生産条件である手摘みによる摘採と自然素材による被覆栽培が他の茶栽培に比べて生産者の労働負担が大きい。高齢化と後継ぎ不足により生産者が減少しているなか八女伝統本玉露の栽培を現在の形態で存続していくのは厳しいだろう(図２)。玉露栽培を守っていくためには新規就農者の増加及び担い手の育成と生産基盤の見直しを行う必要がある。また、高齢化した生産者の負担を軽減し、茶業を存続しやすい環境づくりも重要な課題である。

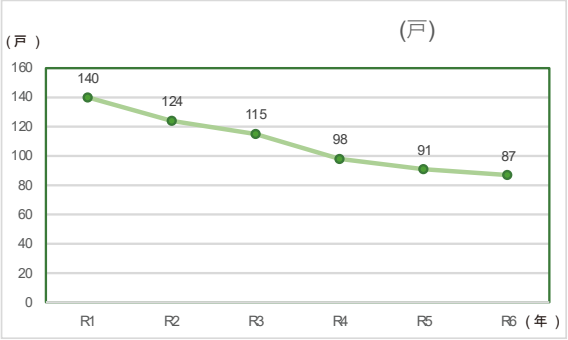


図２八女伝統本玉露の栽培戸数

5. 設計主旨

5.1コンセプト

八女茶産業において生産の場と消費の場の分離による影響を再検討する。さらに、伝統的な製法や営みの保全と持続的な地域産業のあり方を提案する。高度経済成長期以降、茶農家と茶商が分業により、生産の場がそれぞれが独立して営まれている。また消費の場との距離も大きく、消費者と生産者の関係も希薄化している。このような状況下で生産者の高齢化及び後継者不足により現在の体制を維持することが困難になっている。本研究では生産の場を集約し、生産者と消費者の双方に有益な場を提案し地域コミュニティの活性化を目指す。具体的には八女茶の栽培から収穫、加工、流通、販売、提案までを集約した食循環プロジェクトを提案する。

本提案により生産の効率化と労働負担の軽減を図るとともに生産者同士の交流を促進する。消費者が生産過程に触れる機会を提供することで新規就農者の増加と八女茶の価値を認知することを目指す。消費者はカフェや工場見学を通して気軽に栽培までのストーリーを辿ることができる(図3)。直接的な金銭的支援や労働提供だけでなく、八女茶の購入や情報拡散など間接的に八女市を支援することができる。

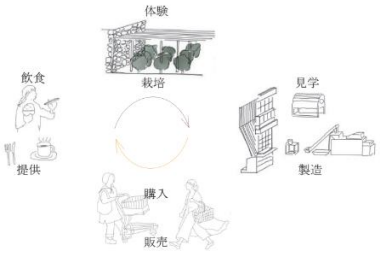


図３　生産者と消費者のサイクルイメージ

このような訪問者が増えることで、八女市の茶産業の維持に繋がり、地域の個性が守られ、距離に関係なく地域の魅力が広がっていくだろう。

5.2ゾーニング

茶畑を基点に段階的に生産から消費までの必要な機能を配置した。斜面地の特性を活かしながら動線が自然に交差し、中央に人が集まる計画とした。製茶工場を中心として生産者と消費者の間に多様なコミュニティが形成されることが期待できる(図４)。

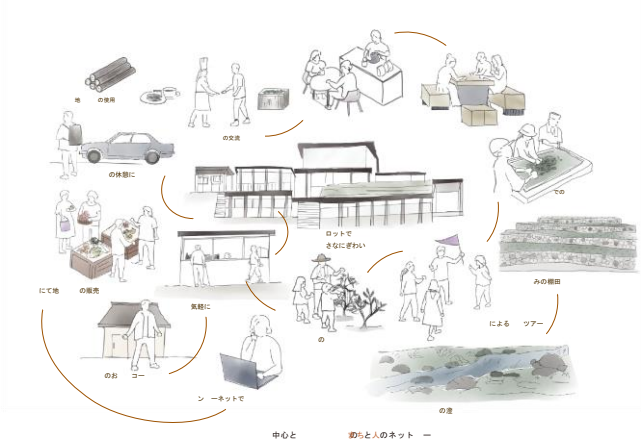


図４　動線のゾーニング図

6終わりに

本計画を通して食を生産の場から守ることの意義と地域の個性を保護することが地域コミュニティを活性化させる潤滑油となることを示したい。

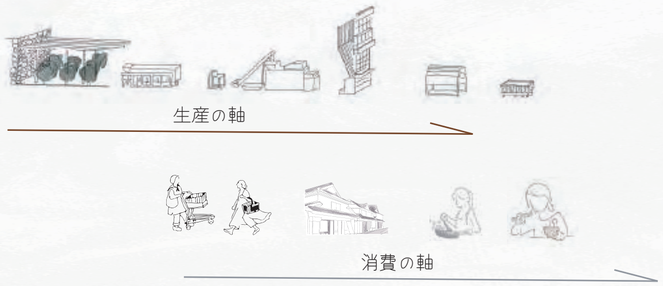
参考文献

1) kaso.pdf (city.yame.fukuoka.jp)
2) hoshino_t.pdf (city.yame.fukuoka.jp)
3) https://www.its-mo.com/maps/address/40210070/

茶の間でくらす

八女茶産業における地域個性の継承とコミュニティの再構築

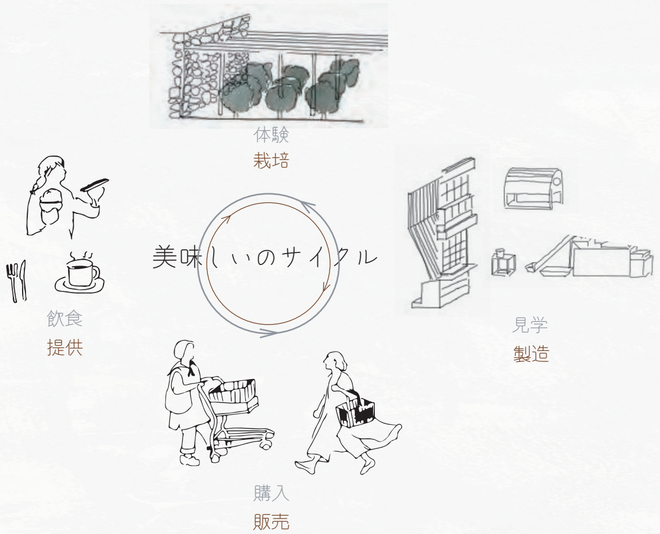
一面に広がる茶畑の景色、生産者の作業風景そのものが八女市星野村の個性を象徴する。地域それぞれが持つ独自の個性をそこに住まう人だけでなく、全体で守っていく必要がある。
生産者の負担を軽減し、長く働ける環境を作ることを目指す。消費者は玉露栽培を実際に見て知る機会をつくることで、商品ではなく生産の過程に目を向けじぶんごとに感じることのできるフードハブ施設を提案する。玉露栽培を通してまち全体が活性化するだけでなく、生産者と消費者、生産者と生産者が新しいコミュニティを構築する重要な場となるだろう。

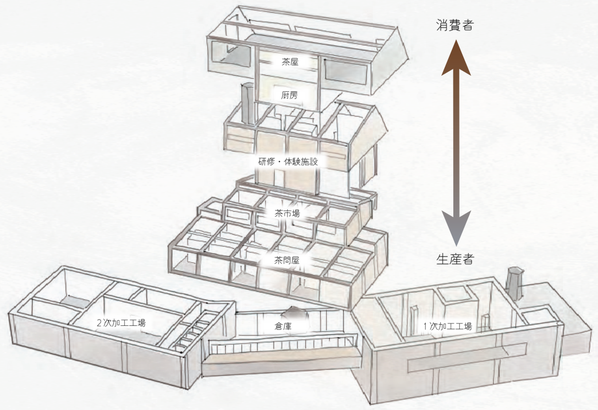


生産の場を集約し、生産者と消費者の距離を縮め、コミュニティの活性化を目指す。
新規就農者の増加と生産者の負担軽減が期待できる。

質＞量を重視した生産

玉露を残すためには生産までのストーリーを知る消費者を増やす必要がある





多くの体験を通して人との繋がりが広がる。この繋がりが弱体化した地域産業を守るツールとなる。